The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞越野優子著『国冬本源氏物語論』
Author(s)	寺田, 伝
Citation	語文. 2017, 108, p. 107-108
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71013
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

越野優子著『国冬本源氏物語論』

寺田　伝

本書は、現在、天理大学附属天理図書館が所蔵する、国冬本源氏物語を対象として、その物語世界の読解を試みるものである。国冬本源氏物語、全五十四帖のうち十二帖は鎌倉後期書写と推測され、青表紙本・河内本を遡る可能性をもつ伝本として注目されるが、越野氏は国冬本源氏物語そのものを読み解いてゆこうと試みる。まずは、その目次を示す。

第1章　国冬本源氏物語の研究の位置付け
第2章　作品論的視座から―国冬本少女巻を中心に
第3章　人物論的視座から―国冬本鈴虫巻を中心とした女三宮について
第4章　和歌論的視座から―国冬本藤裏葉巻をめぐって
第5章　象徴的視座から―本文研究と象徴との接点
第6章　享受史的視座から―国冬本と物語内部、そして外部へ
第7章　翻訳論的視座から
第8章　注釈論的視座から―桐壺・少女・野分・柏木・鈴虫巻の物語世界を中心に
第9章　統計論的視座から―シミュレーションを通してみた国冬本の特異性

右の一覧からわかるように、著者は実に様々な視点から、国冬本の物語世界を解き明かそうとする。以下、各章の概要を記したい。

第1章では、国冬本源氏物語についての研究状況を概観する。国冬本は、岡嶌偉久子氏や工藤重矩氏によって論じられているように、錯簡や誤写と考えられる箇所が存在する。しかし、そのような瑕疵を含んだ本文によっても、源氏物語が読まれていたという事実は無くならないわけであり、そのような観点から、国冬本源氏の物語世界を突き詰めようとする著者の立場を表明する。

第2章は、少女巻を取り上げる。少女巻は、途中、帚木巻が混入するなど明らかな錯簡がみられ特に注意しなければならない巻であるが、著者は、大学博士・夕霧・源氏邸宅における国冬本の描写に焦点をあて、それらを「始原的な源氏物語少女巻の世界」と評価する。

第3章において検討の対象となる鈴虫巻は、女三宮の出家が語られる巻であり、国冬本には女三宮にかかわる多くの独自本文がみられる。先行研究を踏まえながら、「中心より周辺に目配りをし、源氏を支える人々に焦点を当てる」傾向に着目し、女三宮の「大島本では描かれることのなかった、苦悩の深さとその結果としての内面の成長」を表現していることを指摘する。

第4章は、藤裏葉巻において、国冬本が独自本文を有する和歌四首を検討する。一例として、国冬本の「露けき秋」とある独自本文は、他諸本では「露けき春」とある。「露」は秋の景物として一般的であり、ここは源氏物語の革新的な和歌表現ともいえよ

うが、一方で、国冬本の和歌表現が伝統的な規範を保っていることを他の用例をも参照して明らかにする。

第5章では、いわゆる源氏の「命名伝承の二重化」がみえる桐壺巻を取り上げるが、ただし、国冬本には「高麗人」による命名の部分が記されていない。この国冬本独自の物語本文を「世の人の称揚」のみによる「主人公の賞賛の世界そのままの論理で生まれた象徴的美称」と意味付けている。

第6章では、柏木という呼称が、享受者によって創造されたことを国冬本も参照しながら考察し、さらに源氏の呼称についても『須磨源氏』『花鳥風月』、あるいは海外の翻訳テキストも含めて検討する。越野氏は、本学を卒業後、海外で教鞭をとられており、現在は中国の福州大学に所属されている。海外の日本文学研究者ならではの視点を研究に取り入れながら、論はさらに展開してゆく。

第7章では、国冬本ばかりでなく、享受作品としての源氏絵や韓国語版『あさきゆめみし』と対象を広げて、その差異を明らかにする。皇室への呼称の問題などは、日韓の文化の相違が明確に表れており興味深いが、それでもなお源氏物語の多様な世界の一つとしてそれぞれが認められることを提言する。

第8章において、国冬本の物語世界が明確に表れる箇所を中心に、越野氏によって注釈が加えられる。国冬本が「特異な世界」を有していることが端的に示されているが、その世界観が各々の巻で完結しているという指摘は、その書写された時点においても取り合わせ本であった可能性も思わせる。

さらに、第9章においては、近年の本文研究における最新の手法をも積極的に取り入れて、本文をデータ化し統計学的手法によって分析することにより、国冬本の独自性をより一層浮き彫りにしている。

以上のように、越野氏は、国冬本にはじまり様々な視座から、源氏物語世界の広がりを把握しようと試みられている。今後、日本古典文学を海外へ発信する際には、本書で示された物語世界の多様性がその指針となろう。なお、越野氏は海外における日本古典文学の教育状況について、近年「日本古典文学の授業の現況と課題」（「研究と資料」74号、平成27年）、「中国における日本古典文学への一考察〝弱水三千〟から展開する日中語の差異を中心に―」（「詞林」59号、平成28年）において報告されているのであわせて参照されたい。

（武蔵野書院、二〇一六年九月、二五八頁、九，五〇〇円）

（てらだ・つたう　本学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）